

第60回車座集会意見交換内容（健康福祉局）

- 1 開催日時 令和5年9月16日（土） 午前9時45分から午前11時45分まで
- 2 場 所 高津市民館 大会議室
- 3 参加者等 参加者12人、傍聴者等8人 合計20人

<開会>

司会：それでは定刻となりましたので、ただいまから第60回車座集会を始めさせていただきます。

私は、本日の司会を務めさせていただきます健康福祉局地域包括ケア推進室の菅野と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の車座集会は、「認知症の人とともに暮らす地域づくり」と題して、認知症になっても希望を持って暮らすことができる地域共生社会の実現を目的に、自分たちの立場で何ができるのか、参加者の皆様と市長で意見交換を行っていただきます。

それでは、開会に当たりまして、福田市長からご挨拶を申し上げます。

市長、よろしくお願いいたします。

<市長挨拶>

市長：皆さん、改めましておはようございます。今日は土曜日の朝からご参加をいただきまして本当にありがとうございます。

車座集会を始めて60回目ということになります。各区で、それから各市役所の局で、こんなことでみんなと話し合ってみたいというテーマを挙げて実施していきまして、今日は、認知症の人とともに暮らす地域社会では何が大切かということについて、いろいろな立場の方が参加してくださっているので、率直な意見交換をさせていただければありがたいと思っています。

後ほど、資料で説明があるかもしれませんが、川崎市内の認知症の方の人数が、多分6万人を超えていらっしゃるのではないかと。2015年が4万2,000人で、2030年は8万5,000人で、15年間で倍になるということで、私自身、知人もそうですし、お世話になった方もそうですが、認知症の方は周りに結構いらっしゃるの、本当に自分事だと思っているんです。

実は、自分が実際どれだけ地域社会の中で活動できているかなという、大変不安な部分があって。私も、大分前ですけども、認知症サポーター講座を受けて、知らなかったことを知れたことだけでも随分前進なんですけど、さあ、自分がそれに基づいていろんなアクションを起こしているかという、甚だそんなことはないと思っていますので、私も今日は学ばせていただくような気持ちで、皆さんと意見交換できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

司会：市長、ありがとうございました。

本日は、認知症の方にゲストスピーカーとしてご参加をいただいておりますので、ここでご紹介させていただきます。

お名前をお呼びいたしますので、恐れ入りますが、手を挙げていただきますようお願いいたします。

それでは、ご紹介いたします。

初めに、前田さんです。

本日は、前田さんの支援者として、川崎市若年性認知症支援コーディネーターの渡辺さんにもご参加いただきます。

続きまして、田崎さんです。本日はご夫婦でご参加をいただきます。

また、ゲストスピーカーの皆様に加えまして、地域において様々な形で認知症の人と接点のある皆さんにもご参加をいただいております。

これより、柿沼さんから順番にマイクを回ささせていただきますので、1人1分程度で簡単に自己紹介をいただければと思います。皆様よろしくお願ひいたします。

<自己紹介>

柿沼さん：ただいまご紹介いただきました、川崎市認知症ネットワークの柿沼と申します。

川崎認知症ネットワークと申しますのは、認知症の家族会とか、隣人としてまちでミニデイサービスなんかをして、認知症やご家族をサポートしている市民活動グループで、現在全市的に25団体ぐらい一緒になっております。

個人的には、私が20代の後半頃、まだ50代の後半だった父が認知症になりまして、私は横浜で子育てをしておりましたので、約15年間、通いで父の介護に関わりましたが、母も70代になっていよいよ大変になってきたので、家族ぐるみで川崎のほうに越してまいりまして、それから7年、同居をしまして父を看取りました。

父は23年間、認知症の生活しておりましたということでございます。

今さん：皆さん、おはようございます。川崎市民生委員児童委員協議会の会長の今と申します。

私も、主人の父を北海道から引き取ったときに、少し認知症の傾向は見られたんですが、大丈夫かなと思っていたんですが、両親とも認知症になりました。

父のほうは、軽い認知症で私たちも父の行動に対して笑ったりして、すごく楽しくというか、過ごしていたのですが、父が亡くなった途端、もう何月何日の何時頃からという感じで、母が認知症になりました。

父と違ってすごく暴力的な感じの認知症だったものですから、私も何年間か母を看ましたけれども、もう自分ではこの母を、もしかしたら殺してしまうのではないかという気持ちがありましたので、包括センターのほうに相談しましたら、そのときに施設に預けましようかと言われて、そうしたいと言ったのですが、主人的には、俺はどんなことがあっても看るという話だったので、内緒でお願いしておきました。

でも、そのとき順番が70番から100番以内ぐらいで、なかなか入れなかったもので、まずは知人の病院に預けまして、2か月ぐらいしたときにやっと順番が来ました。

そのとき、すごくうれしかったんです。それまで、やはりものすごく大変、こんなに大変なのかなということが、あのときに初めて分かりましたけれども、主人が改めて、こういうふうに預ける施設があるということは、本人だけじゃなく家族の幸せでもあるんだなど、初めて私に言いました。

私は、そのときに初めてあなたに黙って申し込んでおいたのよという話をしましたら、ものすごくありがたかったと話しておりました。そういう意味で、本来なら私は母を最期まで看なくてはならない立場の人間だったのですが、他人様にお願いして見ていただいたという経緯がありまして、私も母が落ち着いてから、地域でお世話できることがあればしたいと民生委員を受けました。受けて19年、こんなにやっついていいものなのかなという感じ、そんな感じで過ごしてきました。

今日はいい勉強の機会だと思いますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

渡部さん：地域ボランティアという立場で、今日は呼んでいただきました。渡部純子と申します。

私は、平成元年から高齢者介護の仕事を始めました。介護保険の開始と同時にケアマネジャーになりまして、70歳で卒業しました。

仕事と並行して、認知症関連のボランティアを始めています。若年性認知症グループで16年、それから、認知症カフェのオレンジリング百合丘というところで10年間続けてきております。それと、認知症キャラバン・メイト活動も多少はやっていますし、私は宮前区に住んでいるんですけども、隣近所みんな80代の高齢になって、中にも認知症の方は本当にいらっしゃるんです。隠れ認知症の方もいらっしゃるって、その方たちを包括センターにつないだり、介護保険につないだりと、そういうことも多少知識のある私の仕事かなとか思ったりしています。

今、82歳になりましたけれども、多少なりとも皆さんのお役に立てることができているかなというのが、自分自身もとても幸せに感じています。よろしく願いいたします。

小島さん：おはようございます。川崎市立看護大学1年生の小島真優です。

今日は、大学の学生代表として来ているんですけど、ふだんは地域貢献委員会という、学校の中の委員会で活動しています。今日も午後から下の階でイベントをやるので、ぜひ来てみてほしいんですけど。

私は、まだ自分自身、認知症の人と関わったことというのはあまりなくて、これから勉強していくので、今日のことがいい経験になったらすごくいいなと思っています。よろしく願いいたします。

舟田さん：皆さん、おはようございます。川崎市立宮前図書館の舟田と申します。よろしく願いいたします。

宮前図書館では、認知症と思われる利用者の方が一時期多くありまして、2015年から「認知症の人にやさしい小さな本棚」という情報提供コーナーを設けまして、ご家族の方、そして利用者の方について、どのような情報を提供したら、ここの地域の中で誰もが安心して暮らせる地域づくりができるのか、図書館で何をしたらいいのかということを考えながら進めてまいりました。

引き続き、いろいろな連携を取らせていただきながら、情報提供、そして少しでもお役に立てればと思っておりますので、今日はいろいろとご意見等をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。ありがとうございます。

星野さん：おはようございます。川崎市浴場組合連合会の星野と申します。

現在、川崎市内には30店舗の銭湯がございまして、浴場組合は風呂屋の組合ですね。現在、川崎市との委託事業で毎週木曜日に半額デーという事業をさせていただいていますし、まさしく来週シルバーウィークに入りますと、市政だよりもぎ取りの券がついていまして、それを持ってきていただくと無料で入れますというふうなことで、川崎市と連携しながら、事業をさせていただいておるところでございますが、その中で、先日もちょっと役員会でお話を伺ったところ、やはり利用者の中には認知症、あと、体の不自由な方がいらして、対応等々について各お店からもいろいろな形で出てくるという状況の報告を受けています。

そういう中で、実はコロナ前にも一度、地域包括ケア推進室さんと何か連携できないかという話があったのですが、コロナがあつたりして、なかなか動けなかったのですけれども、ここでちょっと落ち着いたので、また改めて地域包括ケア推進室の皆さんと…先ほどサポーターのことだとか、あとはいろいろなケースが本当にあつて、ご家族がいる方はご家族にちょっと投げることができるのですけれども、独居の方はご本人に投げてご本人はなかなか行動してくれなかったりとか、そんな問題も抱えておりますので、今日はちょっと勉強させていただきながら、次につなげていきたいなと思っておりますので、よろしく願いいたします。

大瀧さん：おはようございます。セブン-イレブン・ジャパンの総合渉外部というところで、行政を担当し

ております大瀧と申します。

セブン-イレブン・ジャパンでは、2012年に川崎市様と高齢者見守りネットワークという連携協定を結んでおまして、店舗に障害を持っている方ですとか、少しご心配のありそうな高齢者の方がいらっしゃる場合には、地域の連携できる施設にご連絡するなど、見守りをしてまいりました。

今後、高齢者の方がどんどん増えていく中で、そういったお客様も増えるというふうに感じておりますので、社でもそんなんですけれども、加盟店様、お店でどういうふうに地域と関わっていけるかというところを、これからも考えながら連携してやっていきたいと思っております。よろしくお願ひいたします。

三井さん：おはようございます。パルシステム神奈川麻生センターの三井と申します。よろしくお願ひします。

麻生センターでは、配送エリアとして麻生区、多摩区、宮前区の一部を牛のマーク・こんせんくんのトラックで配送する業務を行っております。

麻生センターでの取組としては、去年度から、認知症サポーター養成講座を5回以上開催し、それを元に今年度の6月から麻生区役所の方、地域包括の方、生活支援コーディネーターの方々、あとはおれんじあさおだったり、いろいろな方にサポートをいただきながら、認知症カフェを月に1回、今、継続的に開催しております。

あと、ちょっと認知症とは違うんですけれど、小さいお子さんをお持ちのお母さんが交流する場がないということで、8月から、センターを会場にしてプールで遊ぶなど、子育て交流を1か月に1回開催しています。

今後は、多世代交流ができれば、より地域で幅広く交流しながら地域の課題解決ができれば、と思っ取り組んでおります。

今日は、いろいろ情報をいただきながら勉強させていただき、次に進んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

司会：皆様、ありがとうございました。

続きまして、行政からの出席者をご紹介します。

ゲストスピーカーに挟まれる形で、改めまして、福田川崎市長です。

市長：よろしくお願ひいたします。

司会：石渡健康福祉局長でございます。

ちなみに、というところなんですけれども、認知症の取組、それから普及啓発のシンボルカラーというのが、皆様ご案内のとおりオレンジでございまして、認知症サポーター養成講座を受けると、こういったオレンジリングをもらえます。今日は福田市長もオレンジ色のTシャツを着て参加させていただいておりますので、どうぞ皆様よろしくお願ひいたします。

続きまして、地域包括ケア推進室、鈴木担当部長から、イントロダクションとして、川崎市の認知症の取組についてご紹介をさせていただきます。

鈴木部長、よろしくお願ひいたします。

<事務局からの説明>

鈴木部長：皆様、今日はお忙しい中、ご参加いただきましてありがとうございます。地域包括ケア推進室の

鈴木でございます。

私から、認知症の状況について、それから少し施策の取組などもお話しさせていただきたいと思えます。

まずは、先ほどちょっと統計の話も市長からありましたが、認知症の統計のことからお話させていただきます。

本市の65歳以上の高齢者の状況といたしましては、5人に1人が高齢者で、高齢者の約5人に1人が要介護等認定者、それから、高齢者の約5人に1人が独り暮らしの方、そして推計値ではございますが、高齢者の約6人に1人が認知症の方というふうになっております。

次に、本市の行政区別に見た高齢化の状況でございますが、左側の図となりますが、区別に見ると、令和元年10月の時点で、川崎区、幸区、宮前区、麻生区で高齢化率は21%を超えております。その一方で、中原区は武蔵小杉周辺にタワマンができて、若い世代の流入が多いため、高齢化率がかなり低くなっております。

また、右側の図は、令和22年の推計となりますが、各区で高齢化が急速に進む見込みとなっております。

次のスライドになりますが、本市の認知症高齢者数の推計値となります。

2025年には7万2,000人を超えると推計しております。その後も高齢化の進展に伴い増加を続け、2030年には約8万5,000人を超え、2040年には10万人を超えると推計しております。あくまで推計値ではございますが、ちょっとびっくりするような数字かと思えます。

次に、年齢別の認知症の有病率となりますが、認知症は年齢とともに増加し、80歳を超えると、およそ4人に1人が、85歳以上ではおよそ2人に1人が認知症になると推計されています。日本人の平均寿命は、男女とも80歳を超えておりますので、認知症は長生きをすれば、誰もが高い確率で発症する可能性のあるものというふうになっております。

さて、ちょっと細かい字が並んでおりますが、ニュースでご覧になった方もいらっしゃるかと思えますが、このたび、令和5年6月に認知症基本法が成立しました。その目的として、上のほうに1番として書いてありますが、認知症の人が尊厳を保持しつつ希望を持って暮らすことができるよう、認知症施策を総合的かつ計画的に推進すること。

認知症の人を含めた国民1人1人がその個性と能力を十分に発揮し、相互に人格と個性を尊重しつつ支え合いながら共生する活力ある社会を実現することとされており、地域共生社会の推進が強く打ち出されたことになっております。

基本理念の中では、認知症の人に関する国民の正しい理解、それから認知症の人の生活におけるバリアフリー化の推進、認知症の人の社会参加の機会の確保、認知症の人の意思決定の支援及び権利利益の保護、そして保健医療サービス及び福祉サービスの提供体制の整備などが理念として挙げられております。

先ほどサポーターのお話も出ましたが、認知症サポーター養成講座を川崎市でもやっております、地域や職域で認知症の人や家族を手助けする応援者を養成しております。川崎市では、これまで7万7,267人を養成してきました。

この認知症サポーターがステップアップの講座を経て、認知症の人や家族の困り事の支援に多様な主体と連携してチームで支援に当たる仕組みのことを、チームオレンジと呼んでおります。今、川崎市では麻生区で4か所ほど、このチームオレンジが立ち上がっております。チームの協力により、外出支援ですとか、見守り・声かけ、話し相手などの支援を行っています。

認知症の人との共生社会の実現に向けて、こういった小地域でチームオレンジの取組が広まっていくよう、現在各区の認知症地域支援推進員さんを中心に取組を進めているところです。

最後になりますが、麻生区が作成したポスターをご紹介します。

認知症の人がやりたいこと、暮らしやすいまちについて語ってくれた部分を抜粋して、映し出しております。

認知症の人が利用しやすいスーパーがあるといいなとか、困ったときに近所の人が助けてくれる、そんな優しいまちづくりを望む声が多く聞かれました。認知症の人の意見が、こんなにあるんだなということを知っていただければと思っております。

この後、ゲストスピーカーの皆さんがいろいろと思いを語っていただけることと思っております。

以上、川崎市の認知症の状況と取組についてお話しさせていただきました。

司会：続きまして、本日の車座集会の進め方について簡単に説明をさせていただきます。

初めに、STEP 1として、ゲストスピーカーであるご本人やご家族から、ふだんの生活で感じていることや、地域とのつながりについて発表をしていただきます。

次に、STEP 2として、ゲストスピーカーの発表を参考に、参加者の皆様の感想や、ふだんの生活の中で認知症に関して感じていること、自分の立場でこれからどんなことができそうかなどについて、市長とともに意見交換をし、議論を深めていただきたいと思います。

それでは、これより福田市長にモデレーターをお願いいたします。

市長、お願いいたします。

<ゲストスピーカー報告>

市長：よろしく申し上げます。

それでは、今日お越しいただいているゲストスピーカーの皆様から、日頃、生活する中で感じていることや、地域とのつながりについてご紹介をいただきたいと思っております。

それでは、初めに前田さんにご報告をいただきたいと思っております。

本日は、ふだん支援をされている川崎市若年性認知症支援コーディネーターの渡辺典子さんと一緒に報告をいただけると伺っています。それでは、よろしく申し上げます。

渡辺さん：ありがとうございます。

前田さんにお話を伺いながら進めたいと思っております。

私は、川崎市若年性認知症支援コーディネーターとして、4年前から活動をさせていただいております。主に65歳以下で発症された認知症の方やご家族などからのご相談を受けたり、それからこちらは10年ぐらい前からNPO法人で認知症の人と障害者が一緒に働く事業所というのをやったりしております。

前田さんは、コーディネーターとしてお会いさせていただいたのが約3年前、そこから毎日、ほかの若年性認知症の方たちと一緒に働いて、我々と一緒に社会参加活動をほぼ毎日いただいているという中で、いろいろなお話をいつも聞かせていただいているのですが、実は今回このお話をいただいて、明日どんな話をしたらいいのかなというのを、昨日も2人で打合せしました。

多分、5、6分では話し切れないぐらいたくさん言っていただいたので、ちょっとまとまらないことになるかもしれないんですけども、本当に素直に前田さんからいろいろお話を引き出せたらなと思っておりますので、よろしく申し上げます。

いつも2人で講演をさせていただくときに、インタビュー形式でさせていただいているので、そういった形を取らせていただきたいと思っております。

いつもどおりに…全然いつもと違うすごく硬い感じになっちゃっているんですけど、いつもどおりの

前田さんでお願いします。

はじめに、前田さんご自身が認知症と知る前に、何かご自身の中で、あれ、何かちょっとおかしいなと思ったきっかけとか、その頃のご様子なんかを聞かせていただきたいのですが。

前田さん：認知症という言葉自体もあまり知らなかったんですけども、ただ、自分で変だなと思ったのは、今1人で住んでいますけれども、アパートから深夜に1人で徘徊するというのがありまして。帰ってきたらちょっと変だなとは思いつつながら何度か真夜中に徘徊しているというのがあって、娘は看護師をやっていて、その話をしたら、やっぱりねと言われちゃって、やっぱり何か俺、おかしいんだよなどと初めて認識したという感じです。

自分では全然間違っていることをしているというつもりはないんですけども、実はしていたということが分かって、そうか、これは病気なんだということに気づいたから、むしろ楽になりました。もうこれでターゲットが決まったと。これをやっつければ、また元に戻れるかもしれない。

知らないよりも知っている方がはるかに行動はしやすいというふうに思って、私自身としては、気持ち的にはすっきりしました。これがそうだったのかという答えが出たというだけで、うれしかったですね。

あとは、それに対して次の行動を起こせばいいだけの話だったので、気持ち的には本当に楽になりました。何も知らないで、わけも分からずやっているということのほうが、実は非常に怖かったんですけども、そういう病気なんだということが分かってほっとしました。

渡辺さん：診断を受けたときのお気持ちはどうですかというご質問をいただくそうですけれども、認知症という診断を受けて、逆にほっとしたというところが、そういう何だか分からなくて自分が何になってしまいうんどうという不安と違う安心感というか、落ち着き感というか、腑に落ちたというところなんですかね。

前田さん：見えないものと向き合うよりは、はっきり見えるものと向き合うほうが、こちらとしてはやりやすいなど。だから、そういうふうな結果をいただいたときに、やった！と思いました。あとはこれをやっつけばいいんだということが分かって、自分なりにはすごく精神的にほっとしました。

渡辺さん：逆に、認知症と診断を受ける前、自分が認知症のような症状とか、徘徊とかとご本人がおっしゃっているんですけど、そういうことが起きる前に、認知症というものに対してどんなイメージを持っていたらっしゃいましたか。

前田さん：昔から自分のおじいさんとかおばあさんを見ていて、何か変だなというシーンは子どもながら分かったし、あんなに元気だったおばあさんがどうしてこうなるのかなという、声も小さくなるし、行動も鈍くなっているし、それを見ていましたけれども、私も何かそういうふうになってきたんだというのが分かって、むしろ自分の心の中では安心したというか、見えない敵よりも見える敵のほうが絶対にやりやすいと思っていて、そこがはっきり論理的に答えが出てくれたことが非常に私としてはうれしかったです。

渡辺さん：先ほども、鈴木部長から、高齢化に伴って認知症の方もこれから増えていくというご報告もあったように、昨日の打合せのときも前田さんがおっしゃっていましたが、寿命が延びれば延びるほどというのは、いつもおっしゃっていますよね。

前田さん：健全な体と健全な心を持って長生きできればいいんですけども、そうではなくても、実はできるんじゃないのかなど。客観的に見たら、ちょっとかわいそうだねとかという感じになるかもしれないけれども、本人自身が自分で闘うんじゃないかと、パートナーみたいなもので、こういうことが起きているんだということを自分自身で納得した上で行動するのが、むしろ前向きなのかなというふうに思います。

渡辺さん：いつも、予防しようとしても予防できないんだったら、何かそのために知っておくとか備えておく、というふうにおっしゃっていますよね。

前田さん：そうですね。将来的には、何かの病気だったら簡単なんですね。あなたはこういう病気になりましたよと。でも、この認知症というのは、いつ来るか分からないという、ちょっと不安があると思うんです。

でも、私の場合は来てから分かったので、言ってみればもうあとは闘うしかないかと、前向きに考えるしかないというところで、それで悔やむということはほとんどなかったですね。

渡辺さん：そうすると、前田さんは認知症に対して知らない状態で、ご自身になって初めて、最初はやっぱり慌てたりしたけど、今まだ認知症じゃない人が認知症のことを知っておくことで、慌てずに済むんじゃないかと。昨日、前田さんがご自身で書いているんですけど。

前田さん：あらかじめ分かっていたら、突然来るよりははるかに有利だと思うんですね。準備ができる、そのときに何をしなければいけないかという具体的な行動もはっきりしてくるので、それが突然、後ろからガンとたたかれたような病気だと、やはりそれだけで戸惑ってあたふたしてしまうんじゃないかなと。

だから、いずれは来るかもしれないという準備だけはしておいても、決して無駄じゃないかなと思います。これはいい言葉かどうか分からないですけども…「備えあればうれいな」というやつです。

渡辺さん：語録が1つ、昨日増えたのでちょっと言ってもらおうと思って。

それがどういうものなのかというのをみんなが知っておくことで、やっぱり備えておくことができるとか、社会や地域の人が知っていてくれれば、いざなつたとしても本人も家族も慌てないで済むのではないかというのは、いつも前田さんがおっしゃってくださっていることなんです。

そんな前田さんでも、私が1番最初にお会いしたときは、ものすごく暗い表情でほとんど口もきいてくださらず、何回か私のほうが一方的に話す機会、面談を持たせていただいたような状況だったんですけども、そこからの変化というのは、前田さんの中で何が大きかったですかね、家の中に1人でいたときと、今の大きな違いというか。

前田さん：外に出るということで、人との接点が必要になってくると、否応なしに話をしたり、行動したりという、それが実は自分の頭の中の刺激として非常によかったと思っています。

私はテレビ大好き人間なんですけど、テレビばかり見ても駄目です。人と何かいろいろな話をしたとき、どういふ答えが来るかは予測できない。予測できないところにむしろ魅力があって、この人はこういうふうを考えているんだ、この人はこういうことを考えてこういう行動しているんだということを知ることによって、あ、そうかというところで視野が広がっていく。

つまり、人と話すことで自分の懐が広がる。こんな人もいるんだ、こんなケースもあるんだということを知ることができるというのは、むしろよかったと思っています。

同じ環境の方とお話したときは、非常に気持ちとしては楽になりますね。

渡辺さん：同じ環境というのは、同じ認知症の仲間同士ということでしょうか。

前田さん：そうですね。決して、いい答えなんかは望まなくてもいいんです。何かその人も考えている、私も考えている、そこが言ってみれば、答えはどうであれ、よかったと思いますね。人と人とのコミュニケーションがあるというだけでうれしい。

私は、たまたま今1人で住んでいるので、特定非営利活動法人マイWayというところに行っているいろいろな人とお話したり仕事をしたりするという、それは決してお金に変えられるものではないと思っています。

むしろ、自分のためにやっているというのが非常にうれしい環境で、そうやっていくと、少しは戻ったかなというふうには思いました。

渡辺さん：今は、おっしゃっていた深夜徘徊とかはないのでしょうか。

前田さん：ありません。

渡辺さん：今の生活は一言で言うと。

前田さん：楽しいです。ずっと家にいると、またよろしくなくて、やはり外に出て人との接点があるというのが頭を活性化してくれるんじゃないかな。だから、電車1つ乗るにしても、言ってみれば刺激になるし、人と話しても刺激になるし、意見の違いは当然出てきますけれども、それを肯定するとか、否定するというのも重要な機能なんじゃないのかな、ずっと家に閉じこもっているよりはいいかなと、そういう場を与えてくれたので助かっています。

渡辺さん：こちらもいつも助かっています。ありがとうございます。

最初にお伝えしようと2人で話していた内容は以上です。ありがとうございました。

市長：ありがとうございました。

それでは、田崎さん、よろしいでしょうか。

田崎さん（妻）：田崎です。

うちの主人は、50代の半ばぐらいですかね、車を運転していて道が分からなくなってしまって。建物とかが変わると分からなくなるのかなと思って、そのときはそのままにしていました。翌年も、川崎へ行くつもりだったのに横浜まで行ってしまったり。

運転が仕事でしたので、困ってしまい、私と同じ仕事場の主人のいとこたちが5年ぐらい、あの手この手でサポートして、こうすれば間違いない、こうやればということをしていろいろしていたんですけど、60歳になったときにちょうどコロナ禍になって、仕事内容がちょっと変わったんですね。対面でなくなって、お客さんにいろいろ書いていただいたりする重要な書類をどこかに紛失しちゃったということがあったり、コンビニ払いで払った人にまた集金に行ったりと、クレームが多くなってきてしまって。

これはお医者さんに行かなくてはということで、お医者さんに行って、そのときは長谷川式で27点で、ちょっとサポートすれば何でもできる状態、何も問題はなかった。でも、環境が変わったときに、もう1回テストをしたら、今度は15点になったんです。

まず曜日が分からなくなり、今日は何曜日でどっちに行くというのがもう全然。最初はどうにかサポートできたんですけど、だんだんサポートし切れなくなって、配達しているときに自分が何をしていたのかと思うようになったと私に言ったので、怖くなってしまって先生にご相談したら、運転を止めておいたほうがいいじゃないでしょうかということで、65歳で仕事を辞めることにしました。

何か言ってもすぐ忘れちゃうということと、あと、一番大変なのが方向感覚で、家の中で、お雛様を出すために部屋をちょっと変えただけで、もうどっちがどっちかが分からなくなっちゃう。慣れるのに1週間、2週間かかるという状態で、これがそういう病気なのだ。私自身も施設に勤めていて、大体要介護3以上の方が来られるので、もうその段階を通り過ぎていていつもお会いして…今主人は要介護1ですけれど。本人自身もすごく疲れるみたいで、寝ている時間がすごく長くなりました。脳を使うんじゃないでしょうかね、すごく。いっぱい食べて、脳を使って、たまに夕食を食べた後にご飯を食べていないみたいなことも、志村けんさんのテレビじゃないけれど、あれは本当なんだという状況で。

前田さんと違ってうちの主人は、そう思っちゃうと本当にそうなっちゃうというタイプで、気持ちがすごくナイーブというか、震災のときも自分が直接は震災に遭っていないのに福島出身だからすごく落ち込んでしまったし、腐っているものを食べても腐っていないよと言えばお腹は痛くならないし、腐ってなくても腐っているよと言えばお腹が痛くなっちゃうみたいで、そういうところがすごくあるので、主治医の先生にお話ししたら、じゃあ、診断結果は出ているけど黙っていようということになりました。今でも3か月に1回病院に通っています。

仕事を辞めるまでは自分で病院に運転して行っていたんですけど、潔いところがあって、ドクターが運転を辞めろと言ったんだったら車は廃車をするとあって、何日もしないうちに決断してちゃんと車を廃車にしました。そういう決めることとかはすごくできて、だけど忘れちゃうことは忘れちゃう、方向が分からないというのが、うちの主人。

あと、注意散漫なところがあります。犬の散歩をしていて、自転車が来ているよと言っても危なっかしいとか。地域とのつながりという点では、行けるスーパーは決まっていて、駅のそばに住んでいるんですけど電車には乗れない。新宿へ行くのにどっちのホームから乗っていいか分からない。本当にそこまで分からないのかなというほど、方向感覚がなく、今ここに来るのも乗り継いで来たんですけど、PASMOをいつ出すんだ、という感じで。どこかにしまってしまうので、鞆にくくりつけておくんですけども、何か不安になっちゃう。私と一緒にだから大丈夫よと言っているんですけど、すごく不安になってしまうというところがあります。

ぱっと見て全然分からないので、この病気に関してあまり人に言いたくないというか、黙っていたんですけど、今回、町内会の役員でお金を集める役になって、委任状みたいなのがうちに回ってきたんですね。お宅に委任状がいつているはずなのと言われて探してみたら、主人のベッドの中に委任状に何かを書いたのがいっぱいあって。しょうがないからもう1回書いてもらうようお願いするときに、実はこういう状態なんですとお話ししたら、いつも気さくによくお話ししてくださってそんな状況と思わなかったとご近所さんからは言われたんです。2、30分話しても全然普通に会話は成り立つんですね。

あと、洗濯をどんどんやったり、買物に行けたときはずっと買物に行ったり、同じアイスクリームをいっぱい買ってきて、それを1袋食べたり、そんなことを3か月も続けて大丈夫かなと思ったら、もうそれは終わって次の段階。何か1つずつ問題が変わって行って、今は何が1番問題かといったら、着た

服をつるしておくぐらいかなと。だんだん行動が少なくなってきたのかなと思います。

前田さんのお話じゃないですけど、主治医の先生から、奥さん以外の人と話さないと言われ、脳の刺激にはなりませんよと言われて、コーラスサークルとかに入っただけですけど、うちの主人は行くことができないので、近くの方にうちに迎えに来て連れていってもらおうようにして、何か月かは行ったんですけど、結局、行っても下駄箱に靴を入れるのが分からない。田崎と大きく書いたのをパチンと挟むようにして、これがうちのだよとか、工夫をして送り出したりしていたんですけど、今度は立ち位置が分からない。高齢の方もいらっちゃって、とても人の面倒まで見られる状況ではないので、そのコーラスもコロナ禍にもなったし止めておこうと。

そうするとデイサービスですが、デイサービスも平均年齢90歳位の高齢の方たちばかりだったんですね。自分の親みたいな年齢の人の中に何で入っていかなくちゃいけないんだ、行きたくないと。

でも、コロナ禍のはしりのときだったから、まだ会話もできて、行けばいろいろな人と話ができるというところで、話好きだから行っていたんですけど、パーティションがあったり、ちょっと離されたりして話があまりできなくなっちゃうとつまらなくなってしまう。3か所ぐらいデイサービスを変えたんですけど、今、行っているのは3時間のリハビリ、あと、若年性認知症特化型は、お隣の横浜青葉区に1つあったので、週に1回だけ通わせてもらっている状態です。マイWayさんも考えたんですけど、うちの主人は家からそこまで自分で行くことができないので、1番はそこですね。

あと、インフルエンザの予防注射をしたときも、87歳の母に病院に連れていってもらったんですけど、そこは自分がいつも行っている病院じゃないから、何日か後にいつもの病院に自分で行って注射してきた。2回も注射して大丈夫かしらと思ったんですけど、言うて駄目だと思って黙っていました。何も変な様子がなかったのでも2回しても平気なんだなと思いましたけれど。

以前は、お花を育てていたのが、面倒くさくなってきてだんだんできなくなってくるんですね。犬が大好きなので、今は犬の面倒を見てくれています。犬は話せませんが、気持ちも悟ってくれる。

今日も何で来るんだと言われて、ちょっと自分自身の思っていることとかを話してもらいたいんだと言ったら、行かないと。通っているどんどんもそうなんですけど、今日は行かないとか、そのときの気分があるみたいで、だからそんなに言えないなと思って、黙って私と一緒に行きましょうということで、今日は来させていただいたんですけど。

話す場所があればいいですよ、まず。今日参加されている渡部さんにどんどんでお会いして、気持ちが、何かね。

田崎さん（ご本人）：しゃべれるようになったものね。俺のことをちゃんと見ているのかなと思って、おばあちゃんと言ったらおかしいけどね、お姉様がそうやってくれていたものね。人というのはそういうことですよ、やっぱり、誰かが見ているということだから。あの人（渡部さん）は、おふくろみたいな感じで。ありがとうございます。

市長：田崎さん、ありがとうございました。

お2人からお話を伺いましたが、同じ若年性の認知症ということでも、かなりその状況が違うという形で、恐らく1人として全く同じということはありません。1つ共通していたと思いますのは、お二方とも、やはり地域とのつながり、誰か人との接点を持つということはとても大事だということをおっしゃっていたと思います。

それでは、これから少し皆さんと意見交換させていただきたいのですが、今、田崎さんから渡部さんのお話がありました。渡部さんのところに通っておられるのでしょうか。認知症カフェをやっていたいて、いろいろと接点をつくっていただいていると思うんですけど、ご自身の取組などを含めて、少

しコメントをいただいてもよろしいですか。

<意見交換>

渡部さん：私は、認知症の方に、社会参加というのか、外へ出てきてもらうということがとても大切だと思っていて、私がやっている活動の中では、そこに一番力を入れているんですけども、残念ながら田崎さんのところはちょっと遠くて、まだまだ田崎さんを連れ出してあげることができないんですが、どんなでも、日中、田崎さんも含めて3人いらっしやって、どこかまでお迎えに行く、それから実施事業のヘルパーさんをお願いして集合場所まで連れてきていただくとか、帰りは誰がどこまで送る、どこで家族と引き継ぐとか、そういうことを細かく取り決めないと、認知症の方は社会参加はできませんね。決まった時間にどこかに行くということは全くできないので、その支援がとても大切、細かく企画をするということが大事かなと思って。

その代わりに、出てきていただいたら、とてもいい笑顔をいただくので、やっぱりみんなと会えることがこんなにうれしいことと思っていただいているというのがあって、その笑顔が私たちにいただくご褒美だなと思っています。

市長：ありがとうございます。

そういう意味では、今、渡部さんがおっしゃっていただいたように、渡部さんのところ、どんどんというんですか、そこに行きたくてもなかなか行けない方はいっぱいいらっしやるという意味では、もっと身近なところにそういう場があったらいいなということですよ。

渡部さん：そうです。

市長：そうですよね。

渡部さん：どんだんは、発症が若年の方、ずっと年を取って65歳を超えた方もみんな見えていますけれども、最初の受入れは若年の方ですね。それで行けないんですけど、認知症カフェとかはあちこちで開かれているので、そういうところに皆さんがお越しくださる。高齢の方も見えていますけれども、若年の方が実際に来ているというカフェは、川崎市でもそんなにかないかなと思っています。

市長：ありがとうございます。

前田さんのご自宅から、マイWayさんのところというのは、かなり離れているんですか。

前田さん：離れていますね。私が住んでいるのは、川崎区で。ただ、電車1本で大体行けるのかな、そんなに複雑な乗り降りというのはないので。

市長：どのぐらいかかりますか、ドア・ツー・ドアで。

前田さん：そうですね、3、40分。

市長：3、40分ですね。なるほど。

なかなかマイWayさんのようなところというのは、多くないということでしょうか。

渡辺さん：私どもは障害の保健事業を行っていて、津田山駅前にあるんですけれども、ちょうど川崎でいうと真ん中あたりにありまして、前田さんのように認知症をお持ちで来られる方もいらっしゃる、来たらお仕事を一緒にできるんだけれども、渡部さんが今おっしゃったように、来るというのが課題の方、来ることがまずできないという方がたくさんいらっしゃる、そういった同じような社会資源がやっぱり1か所だけじゃなくて、あちこちの地域にあるというのはすごく大事なことなのかなと思います。

市長：ありがとうございます。

柿沼さんにちょっと伺いたいんですけれども、長年、認知症ネットワークのほうやられていて、いろいろなケースをご覧になってご相談も受けておられると思うんですけれども、今お2人のお話、ケースを聞いて、いかがでしょうか。

柿沼さん：そうですね、やはり若年の方だけではなくて高齢になられましても、社会参加ができるかというところで、すごくご相談が多いのは、その入り口のあたりというのはご本人もすごく不安で、環境が変わることがより一層不安を高めます。

例えば高齢の方だと介護保険の中でデイサービスがたくさんありますが、ご家族はそうやって社会参加してほしいなど。デイサービスは社会参加の1つですね。だけど、ご本人が環境が変わることに対してものすごく緊張されるんですね。だから、なかなか社会参加ができない可能性があるんですけど、若年の方に関しては、一応デイサービスができますけれども、やはりまだまだお若くていらっしゃる、エネルギーがたくさんあって、介護保険以外の地域の中で人と出会うという意味で、マイWayさんとか、どんどんの活動というところが、もっともっと暮らしの場にあるといいかなという感じはするんですね。

それで、私の場合ですと、最初の頃はすごく認知症に対する偏見が強い時代でした。それで、なかなかご家族もご本人も、まず社会の水面下で息を潜めて暮らしている時代だったんですね。そのときに、長谷川和夫先生が聖マリアンナにいらして、諦めちゃ駄目ですよ、人間はまだ2割ぐらしか脳を使っていないから、やっぱりいろいろな人と出会うことによって、まだまだ人間は可能性があるからということをおっしゃったんですね。

さっき前田さんがおっしゃった、備えあればうれしいよと、備えあれば憂いなしというところで、やっぱり認知症がこういう病気で、そこで諦めないで社会全体とつながっていくことで、認知症とご縁があっても、いい暮らしができる。精神的に人として社会参加していくことがいいのだなというところが私たちの活動の原点なんですね。だから、本当に前田さんたちが前向きに動かれている。

それから、最初は嫌だなど思うことはあると思うんですけれども、でもご家族も自然体で、すごく応援されていらっしゃる。まだまだご家族自身も周りに知られたくないという感じの方が多いんですけれども、周りの方にSOSを出せるような地域社会にしていきたいなと思っています。

市長：ありがとうございます。そうですね。

先ほど、田崎さんの奥様のお話で、町会の皆さんにそのことをお話しするのが、最初ためらわれていたような。でも、ちょっと追い込まれ感のようなどころからの、少し周りの人に知ってもらおうというきっかけだったと思うんですけれども、今、柿沼さんがおっしゃったように、もう少しみんなが理解して、自然に話し出せるような雰囲気づくりというの、とても大切なことですよ。ありがとうございます。

今さんは、民生委員の活動を通じて、いろんな地域の方のお困り事、お聞きになっておられます。若年性だけでなく、高齢の方の認知症のこともご相談が多いかと思うんですけれども、ご自身の取組の中で、気づかれていること、思われていることがありましたら、共有していただけますか。

今さん：はい、分かりました。

まず最初に、今日、認知症の方の、当事者の方がそれぞれご自分の体験を通して、本当に素直にいろいろとお話くださった、自分の状況を受け入れて前向きに生きていらっしゃることにすごく感動いたしました。

私たちが1番懸念していますのは、やはり皆さん、家族に認知症があると隠してしまう。だから、どこの家族が困っているのかというのが分かりづらくて、私たち民生委員としては困ることなんですけれども、麻生区は、「認知症にやさしいまち」ということを掲げて、皆さん取り組んでおります。

私たち民生委員も、いろいろな話をされていて、これから様々な講座を開きながら、認知症というのはどういうものかということと、我々が何を手助けすればいいのかということをお話と話し合っていて、これから1年、2年、重ねていこうかなという感じがいたします。

私も、母がすごく大変なとき…ものすごく大きな声と杖で家をたたくということがありました。私が虐待しているみたいじゃないかという気持ちが、私自身もすごくありましたので、まずは皆さんにお電話で母の状態を話しました。すみません、迷惑をかけていると思いますけれども、こういう状態なのでよろしくお願ひしますと言ったら、ああ、大丈夫ですよ。皆さん守ってくださいましたけれども、それがやっぱり1番気持ちの中では大変だったなというふうに思っておりますが、今の田崎さんの、ご主人様のお顔を見ていて、渡部さんと話している姿、すごくいいお顔で、にこにこしながら聞いている。信頼関係ってこんなにすばらしいものなのかということなんです。

だから、私たちも今、ほとんどの麻生区の民児協としては、認知症カフェとは言わなくても、カフェを開いております。やはり、家族とだけ話をしているのは駄目ということは、皆さん知っていますので、他人と色々なお話をしようねということで。うちの町会なんかは、認知症ではなく、本当に子どもから高齢者までという感じのカフェなんですけれども、ご主人が認知症の奥さんを連れてきて、それを皆さんがいろいろとサポートしてくれていたりします。

私は見ているとすごく感動していますし、私が1番今考えておりますのは、認知症の人を支える家族を支えたいということです。自分の経験からも、家族を少し気持ち的に支えてあげられる、何かいい機会はないかなということで、麻生区でくりぼうサロンというのを包括センターが開いているんですね、1か月に1度。それは家族の会です。

私も母が認知症のときに何度か通いました。そして、今回もちょっと気になって行ってきました。やはりその中で、地域の人たちの支えがすごくありがたかったということ。地域の人たちとのふだんの関わり、それが大事かなと、話を聞いていて感じました。

市長：ありがとうございます。

さっき前田さんのご発言で、認知症というものが分かってすっきりしたというお話がありましたよね。見えないものと闘うよりも、見えて、それに対応していくという方が、はるかにすっきりしたということをお話していただきましたけど、当事者の方もそうかもしれませんが、地域の皆さんも、今まで分からないから偏見を持っていたとか、どうしていいのかわからないというものが、サポーターの講座を受けたり、あるいは、チームオレンジに加わっていくということ、知ることによって、あ、こういうつながりができるのかということ、すごく大事ですよ。そのステップを踏んでいくことによって、誰もが住みやすい環境になると、今の今さんのご発言で、思わせていただきました。

そして今、あ、それもそうですねと思ったのは、認知症を支えている家族の方を支えたいと、これ、すごく大事な視点じゃないかと思いました。身体だとか、知的の障害を持たれている方もそうですが、やはり子どもさんがそうで、親がすごく大変になっちゃって、どこかでそのレスパイトといいますか、

環境をつくって差し上げないと、本当に大変なことになってしまうので、やっぱりご家族だけじゃなくて、地域全体で支え合っていくということが何より大事なということをお聞きして、皆さんからのご発言から学ばせていただいたような気がいたします。

ここからは、何か皆様のお気づきの点がありましたら、コメントをいただければと思いますけど、いかがですか。星野さん、よろしいですか。

星野さん：はい。浴場組合の星野でございます。

今、地域というお話がありましたが、私どものところは地域に30店舗、浴場がございます。やはり、特にお年寄りの方は、やっぱり日本人、お風呂が大好きで、皆さん帰られるとき、すごく気持ちがよかったですと、ニコッとされる方が大変多いです。お風呂という1つのキーワードというか、我々が提供できるサービスの中で、地域にありますものですから、お年寄りの率も大変高い中で、この人は認知症かな、ちょっと今までと様子が違うよなというふうな方とどう接していいのか、また、あと、そういう方をどう次のステージというか、地域の方とか、包括センターとか、民生委員の方にどうつなげていいのかということも、まだ僕はよく分かっていなくて、そこら辺を少しつなげさせていただくことができるようになると、もう少し何か違った窓口というか、広がりがつくれるのかな、なんていうふうに思ったところです。

あと、先ほど前田さんのお話を聞いていて、これだけ前向きなものの考え方をされるとするのは、人間としてもすごく勉強させられる、前向きな生き方というのが、すごく参考になったような気がしています。

市長：ありがとうございます。では、じゃあ、私たちにどんなことができるのかなという部分に移っていきたいんですけども、例えば今、星野さんがお話になったように、多分、この人は認知症かなというのか、ちょっと変化が現れてきたよねといったときに、自分の気づきから次のパスをどこに出すかというのが、なかなかつながらないというのがありますよね。まず、皆さんのところで、例えばセブン-イレブンさんもそうですし、コープさんもそうですし、図書館もそうですし、いろんなところで気づいていると思うんですけど、どうでしょう。まず、自分たちは気づいているよというような経験、舟田館長はありますか。

舟田さん：そうですね。やっぱり2015年当時、私が着任した頃に、毎日電話帳を求めてくる方がいらっしゃっていて、一緒に電話帳でお名前を探してあげるんですけどないということで、そういったことが続いたことによって、地域包括支援センターに相談をして、実際に来ていただいた場面があったりしました。

あとは、帰れなくなってしまったということもあって、やはり、そのときも地域包括支援センターや保健所などにお伝えしてということで、そこから少しずつ連携みたいな形で頼るようになった。

この利用者さんが来たときには、できればこの施設にお電話を下さいと。迎えに来ていただくというような場面もありました。

だから、ちょっと、え、と思うような場面があったときには、いろいろなネットワークを構築して、常に連携というんですかね、連絡を取るような対応をしながら、適切にかつ気持ちよく、次にまた利用していただくというようなお力添えをいただいているということです。今まで図書館でできることということで、図書館は高齢者の方の利用が多いですし、お1人で来られる方がたくさんいらっしゃいますし、本が好きだという方が本当に多いですから、そういった意味では認知症になっても引き続き本を読んでいただくというような環境を整える。我々図書館員が柔軟に対応できるように、やっぱり正しい理

解をしなければならないということで、勉強したりとか、認知症サポーター養成講座を受けたりしまして、全職員で体制づくりをしながら、進めているというような状況です。

それと、啓発で認知症の理解をしていただくということで、当然本もそうなんですけれども、チラシだとか、どなたでもご覧いただけるような体制づくりはしているところではあります。

市長：ありがとうございます。舟田さんのところ、すごく意識が高くて、全国的にも好事例として取り上げられるようなところ図書館なんですけれども、図書館という社会資源で、しっかりと受け止めてもらって次につなぐということをやってもらっている、本当にうれしい話です。最初に、舟田さんが地域包括支援センターにつなごうと思ったとき、何かアドバイスがありましたか。もともと知識として持っていたというものですか。

舟田さん：正直に申しまして、持っていなかったんです。実は認知症コーナーという、ミニコーナーを図書館の中につくりました。というのは、そういう案件が多かったものですので、どんな本を並べたら、どれだけ本が動くのかなと思って、実験的にやってみたというのが正直なところ。

そうしたら、すごい勢いで本が動いたということがありまして、これはこの地域とすると、ニーズがあるということをおお程度把握できたんです。そこで、健康福祉局の、地ケアの鈴木部長のところにお電話を差し上げて、チラシ類を送ってほしいと。

要は、本だけではなくて、地域情報を本と一緒にセットにして、それを地域の方にお渡しするといった形ですね。図書館には、ただ本、読書だけではなくて、その地域に見合った、市民に役立つ情報提供をするという役割もありますから、情報が欲しいと言ったら、担当の係長さんが実際に図書館に来てくださって。こんな取組をしているんですねというところから、包括支援センターを知ることができて、じゃあ、一度電話してみようかということで、実際に面通しができて、何かあったときには包括支援センターに連絡をするようにして、すごく密な関係になりました。

認知症サポーター養成講座も、認知症の方への対応の事例集を全部職員から集めて、それを研修の材料としました。1回目は基礎的なことをやったんですが、2件目は、ロールプレイで研修をやるようにしました。そのような感じで研修を重ねつつというような状況です。

市長：ありがとうございます。スーパー図書館ですね、本当に。

舟田さん：とんでもないです。本当に。

市長：本を貸し出すだけではなくて、プラスアルファの情報までお届けすると。

舟田さん：そのほうがいいと。

市長：いや、すばらしいですね。ありがとうございます。

次に、大瀧さん、いかがですか。

まず、お気づきになるということ、結構、各店舗ではあるはずですよ。

大瀧さん：そうですね。やはり、セブン-イレブンだけではなく、コンビニエンスストア全体で、高齢者の徘徊の保護をする場面があります。全体のうち50%ぐらいが高齢者の方の保護という形になっておりまして、知っている方であればご家族様にご連絡をしたりできるんですけれども、初めてのお客様も中

にはいらっしやったりとか、あとは認知症だと気づかない場合は、警察にご連絡、110番通報でご連絡させていただいてという対応がやはり1番多くなっているところではあります。

ただ、地域加盟店様の中には、地域の方々とネットワークを持っていただいている、地域包括支援センターですとか、ケアマネジャーの方とお知り合いであったりとかとされますと、そういったところにご連絡をしていただいたり。あとは、日に何度もご来店された場合には、今日は同じものをもう買っていますよとこちらからお声がけしたりと、きめ細かいケアとまではいかないですけども、加盟店様として対応させていただいているところは多々あります。

また、行政様の主催する認知症サポーター養成講座も、会社全体としては受けられていない部分があるんですけども、個店ごとに受けられているお店もたくさんあるので、もっと増やしていければなというふうに感じております。

市長：ありがとうございます。セブン-イレブンさん、地域包括ケアシステムの推進会議にもご参加をいただいて、これだけ多くの店舗をお持ちというのは、すごく大切な地域資源なので、その方たちが、皆さん、アンテナを張っていただけるだけで、本当に徘徊の保護というと、命にも関わるようなケースを救っていただくこともあるんだと思います。すばらしい取組を本当にありがとうございます。

三井さん、いかがでしょうか。

三井さん：はい。麻生センターの方では、「みまもりあい」のアプリを入れていて、ひとり歩きと言っているんですかね、その情報が来たものに関しては、1日で大体50台弱ぐらいの配送車両、営業車両を含めてあるので、全員に情報を共有して、近くにいる方がいたら、すぐに情報をもらって、連携を図るようにしております。

それ以外に、生協はメンバーシップなので、組合員さんのお宅に1週間に1回お届けに行く。組合員さんは、配送担当と話すのがすごく楽しい方が多いんですね。10月以降になるのですが、配送担当全員に、認知症サポーター養成講座を受けてもらう予定です。人それぞれなんですけど、認知症に関して、理解度は様々だと思うんですね。だけど、講座を受けることによって、気づける担当をいかに増やせるか。そして、気づいたことについて地域包括の方と連携を取りながら、その人が本当に暮らしやすい地域になればいいなというふうに思っています。

センターで取り組んでいるのは、渡辺さんと一度、一緒に若年性認知症の方を配送センターで雇用しようということで、仕事の切り出しとかもして、同じく働くパートナー職員、パートの方々にも、認知症の方が来られる前に認知症講座を受けていただき、理解をした上で助け合いができて、楽しく働ける場づくりもしてお待ちしたんですが、雇用までには至らなかったもので、この先、またそういった方がいらっしやれば、お声をいただければ、雇用したいと思っています。

市長：すごく取り組んでいただいているんですね。ありがとうございます。パルシステム神奈川全体でそういう取組になっているんですか。

三井さん：いや、全体でもやっているんですけども、麻生センターがまず先に。麻生区役所にかなりお力をいただくことができ、地域包括の方々もご協力いただいて、今に至るという形なので、本当に人と人とのつながりが今の形になっているという。

市長：なるほど。ありがとうございます。

前田さん、渡辺さん、今、民間の事業者の皆様ですとか、あるいは図書館だとかという、意識を高く

持ってやっていただいているところを見て、あるいは話を聞いていただいて、どういうふうにお感じになりましたか。

前田さん：いや、今のお話、本当にびっくりしました。そういう目で見てもらえると、本当に我々も助かりますし、何かあったとしても、逆に駆け込んで助けてもらえるという、非常に身近に自分を助けてくれる人がいるという。そういう背景があるだけでもうれしいですね。

市長：ありがとうございます。
渡辺さん、いかがですか。

渡辺さん：はい。我々は福祉事業なので、できることというのは精いっぱいやっても、やはり、市民の皆さんや民間の企業の皆さんと一緒に地域をつくっていくということができないと。
我々だけでは足りない部分というのがたくさんあるところ、一緒に私たちも宮前図書館に行かせていただいたり、もうとにかく外に出ていこう、出ていこうと、仕事の先であったりとか、福祉事業からちょっとはみ出ていることをやっちゃっているところはあるかもしれないんですけど、皆さんと一緒に暮らしていく場をどうやってつくっていくかというのは、我々NPOとしても、課題の1つかと思っています。

市長：ありがとうございます。

いや、ちょっとずつはみ出るのは、大事かもしれませんね。それぞれの分野からちょっとはみ出ると、大分重なり合いが出てくるというふうに思うので。

そうですね。じゃあ、聞いてみましょうか。田崎さん、いかがですか。今、皆さんからのお話を聞いていて。

田崎さん（妻）：知らないことをいっぱい知れてよかったですと思います。お風呂屋さんもそういうことをしてくれている。図書館さん、セブン-イレブンさんもそうなんだと。麻生区のパルシステムも、そう。今まで分からなかったことが分かったというか、やってくれているという、何か安心感というか、少し違いますね。

市長：そうですね。

田崎さん（妻）：全然そんなことに気がつかなかったです。

市長：ええ。やっぱり当事者の方も、お互いに知れるというのは、すごくいい環境ですよ。そういう意味では、話せる場所で情報が聞けるという、認知症カフェなのか、あるいは、多世代のカフェなのか、いろいろな形態があると思いますけれども、そういう場があるというのは、とても大事なんじゃないかなと思いました。

今まで、ちょっと年配の人たちの話を聞いていて、現役の大学1年生、看護大の1年生ですけど、小島さん、どう感じましたか。あるいは、自分にも何かできることあるかなとかというふうな感覚は、ありますか。

小島さん：そうですね。本当に皆さん、いろいろ行動されていてすごいなと思いました。その話を聞けただ

けども、今日参加してよかったなと思ったんですけれど、私はまだ学生の身なので、そういう大々的なことは、まだ全然できないから、認知症の方が人との付き合いをすごく積極的にされているのを知ってはいても、自分が何をしたらいいのかよく分からないというのが多いので、大人の力を借りて、ただ、もっと学生を頼ってもらってもいいんだよというのは、すごく言いたいと思いました。

市長：ありがとうございます。実は私、今年度の初めに看護大学に行きまして、1回、1コマ授業をやらせてもらったんですね。地域包括ケアシステムについてお話をさせていただいて、学生さんたちともディスカッションをしながら、どういうふうに関われるかねという話をしたらですね、結構、小島さんのように、いろいろな関わり方を提案される方がいました。

まず、地域の中で挨拶から始めようということだとか、学生に少し頼ってもらって、こんなお手伝いも私たちができますよという話だとか、お祭りに一緒に参加しようとか、力仕事だったらできるよとか、あるいは、広報活動は私たち得意だよとか、いろいろなアイデアが出たんですね。

ですから、本当に自分たちだけでやると考えないほうがいいですよ。みんなでやろうという、その重ね合わせ方というのは無限にあると思いますけれども。

今日は麻生区のプレイヤーというか、お住まいの方、関わっているがすごく多いんだなと。ご案内のとおり、麻生区は、男女とも全国一の長寿ということで、最高にうれしいんですけど、健康寿命を上げていこうとか、あるいは、今さんもおっしゃっていましたが、でも、「認知症にやさしいまち」をつくっていかう。私も実家が麻生区で、両親は亡くなりましたけど、周辺はみんな80歳代、いよいよ90歳代に迫ってくるんじゃないかなというコミュニティの中だと、いつ誰が認知症になってもおかしくないし、同時に、いっぱいでいらっしゃるんじゃないかというふうに思うので、本当に自分事なんですよ。

柿沼さん、ちょっとコメントをいただいてもいいですか。

柿沼さん：実は、最初、父が大変になってきて、両親の介護で横浜から川崎に移るときに、まずすごく悩んだんです。というのは、父が認知症になってから子どもが3人、年子で生まれて、その子育てをしながら通い介護をしていたんですけれども、いよいよもう駄目かな、じゃあ、横浜に両親を引き取ろうか、それとも川崎に来ようかなと思ったときに、子どもがちょうど受験期だったので、学校を変えるのが非常に不安だったんですね。

でも、川崎を選びました。そして、川崎に来てよかったと思ったんです。なぜかという、うちの父、結構いろんなところをうろろしたときに、地域で顔なじみの方がたくさんいて、お父さん、家の前を通りましたよとかね、床屋さんなんか、うちで今、お茶を飲んで待っていますから、預かっていますからねとか、地域の方がいろいろと声かけてくれて、商店街に行くと、八百屋さんのおやじさんが、今日はこっちの道だよとかね、酒屋さんのお兄ちゃんも、今さっきそこで会いましたからと、皆さんが声をかけてくださったんです。

だから、やっぱり地域でみんなが顔なじみになっていく、そういう地域づくりが本当に大切だなと思ったのですが、残念ながら、今、どんどん商店街がなくなっていますよね。どうするのかなと思って、今日お話を聞いたら、セブン-イレブンさんも生協さんも、いろいろなところの方が皆さん声をかけてくださっている。そういうお話を聞いてほっとしました。

それで、私たちがこれからどうまちづくりをしていくか、認知症にご縁があっても、お互いさまだよ、みんなで支え合っていく地域にしたいねというところが、これからの本当に大切なところで、もう既に始まっているので、これを進めていきたい。

それで、住民の方の支え合いがどうできるかなというところで、実は私たちはワンワンパトロールと

いうのをつくったんです。わんちゃんを夕方にお散歩しますよね。そうすると、認知症の方もちょうど夕方頃、すごく落ち着かなくなる。そういうところで、認知症の方とか小さなお子さんを守って下さいねというところで、ワンワンパトロールを。結構早く、15年ぐらい前に立ち上げたんですけど、その頃はまだやっぱり認知症に対する理解がなかったので、残念ながら消えたんですが、また最近、麻生区からも、認知症ということだけではなくて、地域を、高齢者の方、子どもを守るので、ワンワンパトロールをしますというアナウンスメントがあったんですね。

これだと思ひまして。麻生区だけではなくて、市内、いろいろなところ、ワンワンパトロールだった地域の方の目がさらに広がってくるということで進めていきたいと思っております。

それからもう1つ、コロナ禍ですごく感じたんですけど、人のつながりがちょっと分断されました。それで、特に若い世帯と高齢世帯の接点が本当になくなってきているんですね。そうすると、やはり若いお母様たちとお話をしていると、かわいいお子さんねとおじいさまが撫でようと思うと、触らないでくださいというような感じの、そういうような今の時代の流れがあって、今度は逆に高齢者の方が、子どもの声がうるさい。それこそ、保育園ができるのは反対とかというのがありますよね。

そうじゃなくて、やっぱりお互いさま、いろいろ出会っていかないと、理解が深まらないので、ぜひこれからはいろんな世帯が出会えるように、要するにお祭りですね、みんなで、広場でいろんな人たちが出会うことによって、子どももシニアのことが分かるし、シニアも若いお子さんたちを見ると、いろんなエネルギーをもらえる、そういう地域づくりをこれからやっていきたいなど、今日のお話を聞きながら思ったところです。

市長：ありがとうございます。

今さん、いかがですか。今、地域づくりのことを柿沼さんがおっしゃってくださいましたけれど、まさに今さんは、いろんな人たちをつないでくださっていますよね。コロナの最中もいろんな取組をしていただいて。

今さん：さっき市長さんがおっしゃったように、私の町会、そんなに大きな町会じゃないんですが、敬老の日のお祝いのお話が民生委員に来たんですね、あげてくださいと。なんと、99歳が4人もいます。びっくりしました。

麻生区は長寿日本一ですけども、健康寿命はそうじゃないんです。皆さんでいかに健康を支えていくかというの1つの課題ですけども、私たち民生委員は、気づく、つなぐ、見守る、そういう仕事なので、包括支援センターとは、本当に緊密にいろいろな情報交換は行っております。

だから、どういうふうにこれからやっていけばいいのか。情報が民生委員になかなか入らないというのが1つのネックなんですけれども、助けてください、うち、こういう状態ですという情報が入らない、隠してしまっている。麻生区は、そういうところなのかなと思ひながら、今日、皆さんの話を聞いていますと、本当にいいですよ。やっぱりこうしっかりと皆さんに情報を出してあげてというか。

私たちは認知症講座を設けて、何回か受講しておりますけれども、麻生区役所も、オレンジプロジェクトという、十何年前から、私も最初にそのプロジェクトには入っていたて、今でも続けておりますけれども、やはりもう少し情報が欲しい。そうしたら、力になってあげられるかなというところがあります。

市長：そうですね。ありがとうございます。

さっき舟田さんが地域包括支援センターにつながるまでのお話をされましたけれども、私も知り合いはいるけど、どこに相談したらいいんだろうという方は、本当にたくさんいると思うんですよ。

民生委員さんも、知っている方はものすごく知っていてご活躍いただいているんですけど、どなたが民生委員なのかということをご存じない方も、どういう活動されているのかも実は知らない方もいて、私たちが広報に努めているんですけど、なかなか伝わらないというのはありますよね。

柿沼さん：民生委員が何をしているかということをもっと知らないということで、私たちはいつも民生委員の目を広報しているんですけど、知ってほしいなというところはありますね。

市長：そうですね。ありがとうございます。

柿沼さん：はい。そうすれば、何とか私たちもお手伝いできるかなというふうに思っております。

市長：そうですね。ありがとうございます。
渡部さんいかがでしょう。

渡部さん：そうですね。私は、四国の田舎の出身なので、おせっかいなコミュニティを捨てないで都会に出て生活をしている者なんです。この都会の人を見ていると、隣近所となるべく関わらない、関わりたくないというような方たちが多い。麻生区も確かにお屋敷町とか、きっと恐らく隣の方をろくに知らないというような方がいらっしやるのではないかなというふうに思うんですけど、やっぱり年を取ってからは、どうしても助け合っていけないと、なかなかやっていけないんだけど、それは若いときから隣近所と付き合い、初めてできることなんじゃないのかな。

年を取って、助けてほしくなったときには、もう既に助けてと言えないような状態になっているかなと思うので、若いときから仲良くしておくのは、大事。私のところは、近所が全員田舎の出身で、何度もみんなでバーベキューをしたりしましたね。

それで、剪定ができなくなった人のおうちは、みんなで手伝ったり、かなりごみ屋敷みたいなおうちがあって、ごみを一生懸命、1袋、2袋ずつ毎回出してあげるといようなことはやったりしていますけれども、そういうふうに皆さんがなれたらいいなと思います。

それから、麻生区、新百合ヶ丘のスーパーなんですけれども、8割の店員さんがサポーターの講座を受けているんですね。そこで、私も2回ほど講座をさせてもらったときに、店長さんが出ていらしたので、認知症の買物ツアーをさせてもらえませんかとお申し上げたら、やりましょうと言ってくださって。まだ始まったばかりなんですけれども、それはとてもハードルが低いと思うの。

認知症カフェみたいなところとか、デイサービスとかでなくても、買物だったらハードルが低いですよ。買物をして、後でコーヒーでも飲まないとかであれば、出てきてくれやすいかなと思って。これはぜひともみんなで参加できたらいいし、そういうときに学生さんたちにお手伝いしてもらえると、一緒に華やかにしてもらえると、余計に楽しくなるかなと考えています。

市長：ありがとうございます。

小島さん、期待の声も集まっていますが、どうですか。

小島さん：私自身、生まれてからずっと川崎市に住んでいて、地域とのつながりは結構浅いなというの思っていました。川崎市立の大学に入って、地域の授業とかもあって、そういう取組をしているよという話は聞いても、実際、自分からとなると、第一歩はやっぱり難しいから、せっかく川崎市とつながりのある大学に入れたので、そういったお声がけをいただけたら、本当にうれしいです。私たちが、若さも

ありますし、人数もいますし、本当に皆さんの手となり、足となり、働くので、お話をいただけましたらすごくうれしいです。

市長：ありがとうございます。今、傍聴席から、鈴木部長が拍手していました。ありがとうございます。

大分時間が迫ってきたので、せっかくですから、ひと言ずつ、皆さんにいただきましょうか。よろしいですか。じゃあ、舟田さんから。

舟田さん：私はここ10年、この図書館におりまして、地域を見ながら、何ができるのかということのを常に考えていく図書館でありたいと思っています。

ですので、連携というか、つながりづくりという意味では、帰りに困ってしまったとか、あとは、汚い話ですけれども、お漏らししてしまったというケースがあったときに、それを排除ではなくて、むしろどういうふうを受け止めて、利用者の方の声をしっかり聞きながら、気持ちよく利用していただくかというような対応をしていかなければならない。

そのときにやはり、私たちは福祉職ではありませんので、包括支援センターだとか、地域みまもり支援センターのお力をいただいて、専門職の方などと一緒に、地域資源の1つとして、私たち図書館も入れていただければというふうに思っていますので、ひとつ、引き続きよろしく願いいたします。ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。

星野さん、お願いします。

星野さん：今日、こういう話を聞かせていただいて、私たち、各浴場主として、認知症に対する認識を高めることをまず第1にやりたいと思います。

先ほど民生委員の方もおっしゃっていたように、どう地域につなげるのかということ、最近、個人情報的なことも言われることが多いので、やはりそこら辺をどうつなげばいいのかなということに、我々もすごく迷いがある。

ただ、今日のお話を聞くと、そうじゃないんだという、逆に求められているんだなというときに、積極的に上手につなぐというところを、もう少し自分たちなりに理解をしたり勉強していきたいなと思いました。

鈴木さんともよく相談をさせていただいて、次のステップに進みたいと思いますので、よろしく願いしたいと思います。

市長：ありがとうございます。

大瀧さん、お願いします。

大瀧さん：そうですね。コンビニエンスストアは、まちの安心安全の拠点を目指して活動しておりますので、そういったところで、先ほども買物のハードルは結構低めというふうにおっしゃっていたりとか、あとは、人との接点が大事とおっしゃっていたので、私個人としての意見なんですけれども、やはり一番店舗数が多いところで、皆様の生活の一部になっていることが多いと思いますので、そういったところで、お店をどんどん使っていただいて、買物もそうですし、あとは、人とのつながりということで店員さんとお話をいただいたりというところで、もっと使っていただければと思います。

あとは、地域とのつながりというものは、もっともっと強化していきたいと考えておりまして、前向

きに取り組んでいきたいと思っております。

市長：ありがとうございます。

三井さん、お願いします。

三井さん：はい。今日は参加させていただきありがとうございます。

麻生センターとしても、今年度、認知症カフェもそうですけど、子育て交流も始まったばかりで、まだまだ完成というのではなく…完成はないと思うんですけど、歩み始めたばかりなんですね。

できれば大学生や、いろんな方がそこに参加し、交流をし、いろいろなアイデア、発言を基により良い形に、多世代が交流しながら進めていきたいと思っています。

なので、これから先も皆さんにご相談しながら、ご意見をいただいて、前に進んでいければと思います。今日はありがとうございます。

市長：ありがとうございました。

いや、本当に皆様からすばらしいご発言をいただきまして、ありがとうございました。

じゃあ、石渡局長から、皆さんからのいただいたコメントを受けて、ひと言。

石渡局長：本日はありがとうございます。

すごく心強いと感じたのが正直な気持ちです。あえて呼ばせていただくならば、ゲストスピーカーの方も含めて、これだけの仲間がいると。ただ、我々は同時に、今日、スタッフが結構入っていますけれども、それぞれ感じたことがあると思うんですね。私、すごくいいヒントをいただけたと思っています。と同時に、ものすごく大きな課題だなと。つなぐというところ、すごく大事。でも、そのつなぎ方というのが、ものすごくたくさんあると。つながった後には、もう皆さんが待っていてくださっている。だから、適切な表現が見当たらないんですけども、抽象的になっちゃいますけど、どうしなやかに行政として皆さんにつないでいくか。その知恵出しをこれからしていかなきゃいけないと。

役所の人間は、意外と頭が固いんですよね。そこをどうしなやかにして、今日いただいたヒントを落とし込んで、また皆様たちと、もうお仲間としていいものをどうつくっていくか。若い人の力も含めて、期待しておりますので、引き続きよろしく願いしたいと思います。ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。

やはり、サポーターを増やしていくということと同時に、レベル感を少し上げていくというふうな、今、麻生区のチームオレンジの取組みたいなもの、先ほど資料がありましたけれども、こういったものをもう少し各地域でレベル感を上げていくと。

それから、先ほど今さんも言われていたような、困っている方たちに、自分たちの存在だとか、それぞれのプレイヤーの存在というのが、まだまだ見えていない部分というものもあるので、例えば今日はメンバーにはいませんけど、地域包括支援センターの方だとか、もっともっといろいろな業種の方、地域の中で活動されている方が、どんな組合せ方ができるんだろうと。知恵は無限にあるなと思いました。

先ほどの大瀧さんから、セブン-イレブンでの買物というのは、アクセス、ハードルが低いという話がありましたけれども、物を売っている店舗なんだけれども、その機会を提供する。ソフトという形で、こういう貢献の仕方があるのかという。また、銭湯がお湯をつかることだけではない、見守りの場であったり、あるいは、コミュニケーションの場であったりとか、図書館もそうですよね。僕も改めて気づきがありました。

それと、ちらっと思ったのが、公園なんかも。実は公園の利用は非常に固定的だなと思っていて、今、公園の取組を強化しているんですけども、例えば、夕方の公園で、みんなで椅子1つだけを持ってきて、お茶会をやりませんかというふうなものでも。別に箱がなくても、季節のいい頃、いい時間帯であれば、公園でお茶をみんなで飲もうということだけでも、コミュニティカフェですよというふうな、本当に歩ける範囲でありますから。そういうふうなことをもっと地域でできないかなとか、多分みんなでアイデアを出せば、いろんな取組が出ると。アイデアを出したら、もうメンバーの1人ですから、ぜひそんな形で、もっと輪を広げて、レベル感を高くしていきたいなと思っています。

いずれにしても、私も認知症になる確率が高いというふうに思いますし、自分事として、「備えあればうれしい」という、すばらしい言葉をいただきましたけれども、そんな地域社会をみんなで作り上げていければいいと感じさせていただいた車座集会でした。

ご参加いただいた皆さん、それから、前田さん、渡辺さん、田崎さん、本当にありがとうございました。では、司会に戻したいと思います。

司会：皆様、本当にありがとうございました。ゲストスピーカーの方のお話から始まりまして、意見交換会、皆様自身もいろいろな気づきがあって、有意義な時間になったのではないかなと思いますし、私自身も非常に勉強になりました。本当にありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、第60回車座集会を終了いたします。

本日はご参加くださりまして、誠にありがとうございました。